

## カナダ・アメリカグランプリに参加して

国際審判員 安永三郎

私は、カナダ GP とアメリカ GP に審判員として参加させていただいた。自分の審判技術はどうなのか？ということが一番の目的であった。それからオリンピックが終わり次の年ということで新しい選手など次を担うであろう選手を見に来ることも目的の一つであった。どちらも初めていくところなので気持ちも一段と引き締まった。

そんな気持ちで大会を迎えた。カナダ大会はアメリカ大会と比べてやや小さく参加国も選手もやや少ないのかなという感じの大会であった。

FINA からスティーブ・マックファーランド氏が来られて、ジャッジミーティングも開かれた。会議では全体の印象ということ強く言われた。開始の姿勢とアプローチ、踏切、空中演技、入水などの技術と美しさが審判には影響するがあくまでも、「overall impression」が大切だということだ。日本でも言われていたことなのであまり目新しいことではなかった。後は1日前の競技のDVDでジャッジの採点についてカテゴリーが違うものをピックアップして説明していた。

OL後、ルール改正では、7月の世界水泳で決める（見直す）ということでは今提議をしているとのことだ。「演技が近い時は、コーチは選手に伝えなければならない」「頭部が台にあたることを根絶させて、危険なスポーツの分野に入らないようにしていく」「最高4.5に頭が近い演技を追加する」これらを7月に決めるということだ。

アメリカ大会は今では珍しい屋外プールで行われた。フロリダの強い日差しが心配されたが、なんとか持ちこたえた。アメリカダイビングを支えてきた（らしい）フォートローダーダールの屋外プール……。なんと今年が最後の大会であるらしい。新しいプールをつくる。しかも屋外プールである。ここら辺にもアメリカダイビングの奥深さを感じる。

両大会を通してジャッジのほかに思ったこともある。「日本選手のアップの取り組み」このことは同行していた成田崇矢氏も同感であるということなので氏に任せることにする。予選では体が動く、知らない間にセミファイナル、ファイナルと進んでいく時に疲れがたまってくる。板のテイクオフのとき腕を振りむく(腕を上げる)という動作ができなくなってきてしまう。本人はやっているつもりでも自然と体が楽な動きのほうに動くので、正確な動きができない。その中で演技を決めるのは至難の業であろう。試合上手な選手はその辺がうまく、自分の体と対話ができるかどうか問題であろう。

しかし、今回はゴールの姿が（状況）はつきり見えた気がする。より具体化した問題点、それに向かって進むことだ。そうすればゴールインは間違いないであろう。青木副会長の言われた飛込は意見（考え）を一つにまとめて進むことが必要である。そう一番肝心の選手とコーチの考えが違ってはだめだということである。これらを一つ一つまとめれば必ずゴールインするはずである。

最後に今回2週間以上の遠征をさせていただいた日本水泳連盟と遠征にご理解をいただいた鳥取県教育委員会、学校関係者に多大に感謝申し上げて報告書とします。